

『陣中日誌』から見た補助輸卒隊の日露戦争（3）

Research on Auxiliary Transportation Units in the Russo-Japanese War Using
“Jinchu Nisshi (Action Diary of Units on the Battlefield)” (3)水 本 浩 典
MIZUMOTO Hironori

はじめに

1. 本来補助輸卒ナル名称ナシ
2. 此例式ハ必ス陣中日誌ノ巻首ニ貼付スヘシ
3. 軍^{いくさ}するのは、輸卒^{ちから}の力 かてよかてよといひ送る (以上、本誌第 42 号掲載)
4. 輸送荷物 精米二百二十石（四十四石）大麦二百七十俵（五十四石）
5. 第一二〇号ヲ以テ、石田高家店支部長ヘ火災損害賠償ノ件ニ付、回答
6. 下士一名輸卒百九十名ハ、薪炭製造及其運搬ニ従事ス、
7. 戦闘力ナキ敵兵若クハ、敵ノ死体ニ過酷虐待ヲナスベカラザル件 (以上、本誌第 43 号掲載)

8. 監部会報 第二軍正面ノ敵ハ得利寺ニ、第三軍ハ安子山ヨリ台子山ニ至ル線ヲ占領、

補助輸卒隊は、まさに師団の末端に位置付けられる「縦列」の補助をすべき役割を担う部隊として編成された。たしかに『第十二補助輸卒隊陣中日誌』には、戦闘場面に遭遇したとか、自ら銃を取ったといった戦場の華々しい出来事は一切出てこない。常に師団の行軍・戦闘に追従する兵站司令部に直属し、後方勤務が主な活動の場であった。では、まったく日露戦争の状況を知らなかったかということ、そうでもない。どうも、刻々と動く戦況を知らされていたと考えられる。従軍日記を読んでいると「会報」として様々な戦況が伝達されていたことを記録している。

「会報」については、本人自身が日中戦争時に中隊長として出征し、戦後も長く軍事史研究者として活躍した藤原彰が以下のように注解している。

会報・師団や連隊などの部隊が、隷下、指揮下の部隊に命令を伝達したり、必要事項を通達するため、時間を定めて命令受領者や関係者を集合させることを会報という。⁶⁸⁾

68) 藤原彰「注解」小野賢二・藤原彰・本多勝一編『南京大虐殺を記録した皇軍兵士たち』大月書店、1996、p.xix。

また、原田政右衛門『大日本兵語辞典』では、「会報」を次のように説明している。

連隊副官が命令を伝達し報告を受取る為め隊長の定むる時刻（至急を要するものは其の度）に於て日々各大隊副官及び各中隊の曹長を招集することを云ふ。⁶⁹⁾

藤原も原田もこの「会報」という部下を参集させて隷下の部隊に命令などを通達する方法は、何時の時期から始まったのかを書いていない。『野外要務令』⁷⁰⁾などを通覧してもはっきりとしない。

そこで、日清戦争時に作成された従軍日記を参照してみると、命令などの下達文書を受領し記録したものは散見されるが、「会報」について記録したものを見出しえない。そこで、アジア歴史資料センターが公開している資料のなかから、「会報」に言及している資料を検索してみると、簿冊資料として「明治 27～8 年 日清戦争 歩兵第 2 連隊歴史」⁷¹⁾を見出した。これは、第一師団隷下の歩兵第二連隊が 1896（明治 29）年 9 月 15 日に印刷発行したものである。その「第五篇 金州城附近之駐軍」に、次のような資料が記録されている。

十一月二十四日 師団会報ニ於テ受領シタル通報左ノ如シ、
 第一師団会報十一月二十四日於旅順口
 通牒
 別紙ノ通り大本営副官ヨリ通牒越候也
 明治二十七年十一月二十四日 第一師団参謀長 大 寺 安 純
 別紙（以下略） (明治 27 年 11 月 24 日条)

以下に、発せられた命令書の内容をそのまま転記している。
 また、12 月 7 日条にも、「第一師団会報」が掲載されている。

本日受領シタル師団会報ノ趣旨左ノ如シ、
 第一師団会報十二月七日於金州城
 一金州城内四辻南方ニ浴室アリ、軍司令部ト協議ノ上、左ノ通り将校下士卒ノ入浴ヲ許サル、
 将校 毎自午前七時至同十一時
 下士以下 八日九日十一日十二日以下二日目ニ一日ヲ隔テ、自午前十一時至午後二時
 輸卒馬卒人夫 自午後二時至同五時
 二（以下、四まで略）

69) 原田政右衛門『大日本兵語辞典』、国書刊行会、1921、p.48。

70) 戦時等における軍隊についてその行動を定めた規則集が『野外要務令』である。しかし、そこには、「司令部ト軍隊トノ連携」のため「命令」「作戦命令」「日々命令」「通報」などの発し方について規定しているが、「会報」については明記されていない。本稿では、『野外要務令』金城堂、1894 年印刷・発行などを参照した。

71) アジア歴史資料センター公開の資料として閲覧が可能である。C13110290700

以降、連日のように「師団会報」の内容が記載されている。その内容は「命令」や「通達」、それ以外の細々とした諸注意や軍内部の動向などである。

このように日清戦争下では、「会報」が隷下の部隊に対する命令・伝達・注意などの手段として使われていたことがわかる。

一方、日露戦争時の「会報」については、第1師団隷下の高崎第15連隊の第6中隊が戦地で作成した公的記録ある「陣中日誌」が「第十五連隊 日清戦争「陣中日誌」 明治三十七・三十八年」と題して翻刻・公刊されている⁷²⁾。

この「陣中日誌」には、12月17日以降、連日のように「会報」の記載がある。

・会報

一、大隊長ノ注意 今日第八中隊須賀上等兵ハ大隊長ニ対シ敬礼ヲ行ハサリシカル事ナキヲ要ス

一、作業ニ行キテ土囊ヲ粗末ニ取扱フ依テ以来注意スヘシ昨日ノ作業ハ半部以上落ち居レリ。

(以下、7項目略)

(明治37年12月18日条)

・会報

一、防寒具ノ取扱ヲ丁寧ニシ暖カキ日ニハ用ヒサル事覆面ハ頭ニ直接カムル事帽子ノ上ヨリハ不可

一、武器ノ手入ヲ充分ニスル事休止部隊ハ銃口蓋ヲ付スル事

一、敬礼ハ不充分幹部ハ訓導シ不都合ノナキヲ用ス

(以下、5項目略)

(明治37年12月19日条)

このように高崎第15連隊に所属する第6中隊が記録した「会報」では、様々な注意事項などが伝達されたことがわかる。戦況を伝える「会報」も記録されている。

会報

一、正午十二時松樹山ヲ確實ニ占領セリ我死傷百名ヲ出テス

一、第九師団ハ午后三時二龍山ノ東南方高地（イボシ山）ヲ占領セリ支那旧囲壁ニアリシ敵兵ハ南方ニ退却セリ

(明治37年12月31日条)

同日に「右翼隊命令」が「午後六時於92高地」から発せられ、「師団ハ松樹山砲台ヲ占領シ尚ホ松樹山補備砲台ニ対スル攻撃準備ノ為メ目下工事中ナリ」と書いて、未だ旅順攻略の手を緩めていないことがわかる。翌年1月1日にもまだ攻撃を続行していることが書かれているが、翌1月2日

72) 高崎市史編さん委員会編『新編 高崎市史 補遺資料編 近代現代』高崎市、2001所収。記載は明治37年12月17日から翌年7月31日まで。表紙に「陣中日誌2」とあり、開戦時からの日誌「1」の存在が推測されているが所在は不明とされている（同解説 p.151）。

には、

一、本日午後四時三十分談判決了セリ

一、之ヲ以テ彼我ノ戦斗ハ終リヲ告ク

(明治 38 年 1 月 2 日条)

と書かれている。このように、「会報」では、細々とした注意事項から戦況まで隷下の諸部隊に知らしめるために開催されていることがわかる。

そこで、『第十二補助輸卒隊陣中日誌』から、戦況はどのように補助輸卒隊に伝わっていたのかをみていく。

見出しに使ったのは、明治 37 年 6 月 14 日に安東県に宿営しながら糧秣輸送に邁進していた時に伝えられた戦況を記録したものである。

ここで、第十二補助輸卒隊が朝鮮半島北部の梨花浦に上陸し近くの仁平里に舎営して本格的に輸送任務に就いた明治 37 (1904) 年 4 月 13 日以降の日露戦争の経過を表にして示しておきたい。

表 日露戦争経過年表

1904 年 5 月 1 日 鴨緑江会戦 (日本第一軍、鴨緑江を渡河して九連城を占領)

5 月 25 日 日本第二軍、金州・南山を占領

5 月 31 日 乃木希典中将、第三軍司令官に任命

6 月 15 日 常陸丸事件 日本第二軍、得利寺付近でロシア軍と交戦

6 月 20 日 満洲総司令部を編成

7 月 26 日 日本第三軍、旅順攻撃を開始

8 月 10 日 黄海海戦

8 月 14 日 蔚山沖海戦

8 月 19 日 第 1 回旅順総攻撃 (8 月 24 日まで)

8 月 22 日 第 1 次日韓協約調印

8 月 24 日 遼陽会戦 (9 月 4 日まで)

9 月 19 日 第 2 回旅順総攻撃 (前半、9 月 22 日まで)

10 月 9 日 沙河会戦

10 月 26 日 第 2 回旅順総攻撃 (後半、10 月 30 日まで)

11 月 26 日 第 3 回旅順総攻撃 (12 月 6 日まで)

1905 年 1 月 2 日 旅順開城

1 月 25 日 黒溝台会戦

2 月 21 日 奉天会戦 (3 月 10 日まで)

5 月 1 日 日本海海戦

6 月 12 日 ロシア、講和勧告を正式に受諾

7 月 31 日 日本軍、樺太を占領

8月9日 ポーツマスで日露講和会議開始
8月12日 第2回日英同盟協約調印
9月5日 日露両国、日露講和条約（ポーツマス条約）調印 日比谷焼打事件
10月14日 日露両国、日露講和条約（ポーツマス条約）批准（終戦）
11月17日 第2次日韓協約調印

表に掲出した戦いを、第十二補助輸卒隊はどの程度知っていたのかを検証してみたい。見出しに使った得利寺の戦いは、明治37年6月14日互いに火砲を交え、翌15日にロシア軍が撤退するからで終わる。『第十二補助輸卒隊陣中日誌』では、戦闘が終わった翌日16日に、

監部会報（中略）、第二軍得利寺附近ノ戦闘（第一軍經由）、（明治37年6月16日条）

と、兵站監部での会報の場で情報が伝えられている。

年表では、6月15日に「常陸丸事件」が起こっている。陸軍徴傭船「常陸丸」他3隻がロシア軍艦によって撃沈破された事件である。『第十二補助輸卒隊陣中日誌』では、6月18日（事件発生から3日後）に、兵站監部の会報の場で知らされている。

監部会報 運送船常陸丸去ル十五日筑前ノ沖島附近ニ於テ露艦ノ為メ撃沈セラル、平壤丸ハ竹敷港ニ避難セリ、（明治37年6月18日条）

このようにみえてくると、補助輸卒隊まで迅速に戦況に関する情報を伝達されていたことがわかる。

そこで、表に従って順次検証していく。まず、5月1日の「鴨緑江会戦」については、これもち早く情報が伝達されている。

田島第十一隊長ヲ経テ参謀長ヨリ、軍ハ五月一日鴨緑江ノ敵ヲ攻撃スル筈ト伝達アリ、（明治37年4月24日条）

鴨緑江会戦開始以前に補助輸卒隊は参謀長から5月1日に攻撃する計画を伝えられている。この時期には、第十二補助輸卒隊はまことにのんびりした状況にあり、輸送任務の途中で、「山上ニテ観戦」（4月30日条）したと書いてある。しかし、これは部隊としては失策であったようで、宿营地・筆里に帰還した後、明日（翌日は休業の予定だった）の「戦況視察」について注意されている。

本日 帰還舎営 明日休業戦況視察注意ノ件（明治37年4月30日条）

本日早朝、鴨緑江対岸ノ敵兵ヲ掃蕩シ、我軍進テ、九連城ヲ占領セリト、（明治37年5月1日条）

5月12日には、「鴨緑江会戦勝利」に関して、天皇の「詔勅」（5月6日電報）と皇后からも「感賞」があった旨（5月6日電報）、皇太子の「令旨」が出されたことを伝えてきている。このように主な会戦などの成果に対して「詔勅」や「令旨」などが出されている（出された宛先は、軍司令官宛）。この「詔勅」や「令旨」が最末端の補助輪卒隊まで伝達されたことになる。

6月20日に「満洲軍総司令部」が編成された件は、4日遅れの6月24日に、命令として伝達されている。

一、我第一軍ハ大山満洲軍総司令官ノ指揮下ニ入ル、（明治37年6月24日条）

7月26日から、いよいよ旅順攻撃が開始される。この情報も、石田（兵站）支部長から伝達を受けている。

午後十時、石田支部長ヨリ、第三軍ハ廿八日払暁ヨリ攻撃ヲ始メ、正午頃、テウレイン、エイカクセキノ線ヲ占領ス、（明治37年7月29日条）

しかし、8月10日の「黄海海戦」や8月14日の「蔚山沖海戦」についての記述はない。そもそも伝達されなかったと憶測される。

8月19日から始まった第1回旅順総攻撃については、8月24日（一旦、総攻撃を終えた日）に、兵站司令部会報で「第三軍ノ情況」とだけ記載がある。第1回総攻撃があまり芳しい戦果をあげなかったことが、このようなそっけない会報での情報伝達になったと思われる。

8月24日の「遼陽会戦」については、両軍が激突した激しい戦いであった。この戦いが終わった9月4日から8日遅れで、兵站司令部会報の席で、「遼陽占領ノ情況」（9月12日条）が伝達されている。

10月9日の「沙河会戦」については、10月26日に兵站監部を経て「勅語」と皇太子の「令旨」を拝受したとの連絡が入っていることから、知ることができる。

第2回及び第3回旅順総攻撃については、まったく記述がない。翌年1月2日の「旅順開城」については、後述する。

明治38年1月25日には、黒溝台会戦がある。ロシア軍の奇襲攻撃から始まり、日本軍側の情況判断ミスによって、秋山（好古）支隊が全滅の危機に瀕するなど、からくも勝利を得た戦いであった。この「黒溝台会戦」に関する記事も出てこない。

2月21日から3月10日までの17日間の両軍合わせて60万の軍隊が激突する日本軍が初めて経験する大規模な会戦、いわゆる「奉天会戦」が行われた。ロシア軍の北方への撤退を受け、からくも戦闘状態を抜け出すという劇的な勝利にはほど遠い戦いであった。『第十二補助輪卒隊陣中日誌』では、この「奉天会戦」について以下の記述を見出すことができる。

・来翰（中略）、同乙第三〇六三号ヲ以テ、蟬崎参謀長ヨリ奉天附近ニ進入スルニ際シ、皇陵

霊地ニ対スル訓示、

(明治 38 年 3 月 4 日条)

- 来翰 (中略)、第一軍渋谷兵站監ヨリ満洲軍ニ賜ハリタル勅語伝達書、

(明治 38 年 3 月 10 日条)

- 行軍 (中略)、舍營地 (唐家屯兵站司令部管内達子堡 筆者注) ノ景況、達子堡ハ唐家屯南方約一千米突余ノ小村落ニシテ戸数三十余、家屋ハ一般大ナラス、殊ニ数日前ノ激戦地タルヲ以テ崩落、若クハ大破損者多ク、之カ附近ニハ死体馬糞其他ノ汚物堆積シ、衛生上最モ悪シ、

(明治 38 年 3 月 12 日条)

- 四 勅語令旨 渋谷兵站監ヨリ、我満洲軍ニ賜ハリタル勅語、並ニ皇后陛下皇太子殿下ヨリ賜ハリタル令旨ヲ伝達セラル、

来翰 (中略)、奉天附近ノ会戦ニ於テ、我軍ニ捕エタル露国附外国通信員ノ談話要領、

(明治 38 年 3 月 21 日条)

- 五 勤務実況 本月一日、奉天大攻撃開始以来ハ、焼達勾、達子堡ニ在リ、主トシテ八家子・焼達勾間薪炭輸送、下柳河炭坑間患者輸送、唐家屯・朱家屯間 (行程約五里半) 並ニ白深寨間 (行程約二里、一日二往復) 糧秣輸送ニ従事シ、嘗テ一日ノ休暇ナク激務ノ結果、兵ノ疲労云ハン方ナク、殆ント労働ノ極度ニ達セリ、

(明治 38 年 3 月 25 日条)

『第十二補助輸卒隊陣中日誌』における「奉天会戦」に関連する記述からも、「奉天会戦」が相当な激戦であったこと、満洲軍上層部の扱いも他の「会戦」とは違っていることをうかがわせる記述になっている。第十二補助輸卒隊も連日「輸送」に追われ、あまりの「激務」に「疲労」は「極度ニ達」したと書いている。

5 月 1 日には、日本海軍大勝利に終わった「日本海海戦」がある。この日は、鴨緑江戦勝祈念日として「一般休務」となり、八家子兵站司令部で「催ノ各部隊連合相撲」に参加・見物し、「各宿舍毎ニ祝盃」をあげている。これ以降も、まったく「日本海海戦」に関する記述はない。わずかに、6 月 4 日の会報で、「本日、海軍戦闘ノ秘密ヲ解カル」とあるだけである。どうも、『第十二補助輸卒隊陣中日誌』からみる限り、海軍の戦果に対しては極めて冷淡な扱いしかない。

ここで、第三軍による旅順攻略について、明治 38 年 1 月 1 日の『第十二補助輸卒隊陣中日誌』の書き振りを紹介したい。きわめて特異な記載になっている。

午后十一時三十分、ステッセルハ本日第三軍乃木司令官ニ旅順開城ノ申込ヲナシタリトノ快報ニ接シ、歓呼湧クカ如ク万歳ノ声ハ宿舍ヨリ宿舍ニ伝ハリテ、天地震撼、士気大ニ振ヒ、忽チニシテ「にはか」トナリ、忽ニシテ軍楽隊トナリ、而カモ軍容肅々タルヲ失ハズ、翌黎明ヲ期シ祝意ヲ表セン為、兵站司令部及ビ守備隊ニ至リ万歳ヲ連呼シ、余興トシテ諸種ノ狂言ヲ演セラレタリ、

(明治 38 年 1 月 1 日条)

翌日には、

旅順開城ニ付、特別加給トシテ、清酒二合・生肉四十匁宛ヲ支給セラル（明治 38 年 1 月 2 日）

1 月 15 日には、

来翰 第一軍兵站監部ヨリ、（中略）、旅順開城規約附録、（明治 38 年 1 月 15 日条）

1 月 20 日には、

来翰 第一軍兵站監部ヨリ、（中略）、旅順攻圍軍ニ賜ハリタル勅語及感状写二十四葉、
（明治 38 年 1 月 20 日）

1 月 26 日には、第三軍に下された皇太子の令旨、乃木第三軍司令官が勅語・令旨に対し「奉答文」の「写」が来ている。以下が「写」の全文である。

皇太子殿下令旨

勇敢無比勇烈不撓ノ攻撃ニ依リテ、旅順要塞ノ鉄壁ヲ破リ堅艦ヲ碎キ、遂ニ守將ヲシテ、城ヲ開キ降ヲ請フニ至ラシメタル第三軍ノ偉大ナル奏功ヲ嘆賞ス

奉答

旅順要塞ノ攻略ニ対シ、優渥ナル勅語ヲ賜ヒ、臣希典等感激ニ堪エズ、謹ンデ奉答ス

奉答

旅順要塞ヲ攻陥ニ対シ、特ニ優渥ナル令旨ヲ賜ハリ、臣希典等感激ニ堪ヘズ、謹テ奉答ス

（明治 38 年 1 月 26 日条）

以上が、『第十二補助輸卒隊陣中日誌』にみえる旅順開城関係の記事である。1 月 1 日夜半に入って来た旅順開城の一報を聞いた第十二補助輸卒隊は、まるで我が事のように欣喜雀躍している情況が活写されている。翌日には、当事者たる第三軍とは関係がない第一軍の将兵に、「旅順開城ニ付、特別加給」までされている。このような厚遇は、他の会戦の際にはまったく記述がない。しかも、「旅順攻圍軍ニ賜」わった「勅語及感状」の写しを 24 枚も第十二師団の最末端の補助輸卒隊まで送ってきている。満州軍全体では、どれだけの「写し」が配布されたのか。それを考えると、満州軍にとって「旅順開城」が今回の戦争にとって最も重要な位置付けと認識されていたことを如実に物語っているように思える。

『第十二補助輸卒隊陣中日誌』をみると、さまざまな時点で「勅語」や「令旨」が伝達された記事が出てくる。まったく戦場に出ない兵站輸送の最末端を担う補助輸卒隊にまで「勅語」や「令旨」が下賜されたことを伝える意味はどこにあったのであろうか。

第三軍に属した第十一師団野戦砲兵第十一連隊の中隊長（途中から少佐、大隊長に昇任）だった森俊蔵の「従軍日記」⁷³⁾は、旅順攻圍戦を闘った第三軍の状況を克明に書いてくれている（以下

「森従軍日記」と略す)。森は、この日記のなかで、実に冷静に上司の優柔不断さや戦場を知らない軍医部長の視察などに、痛烈な批判や罵倒に近いことばを残している。森は、自分自身も参加した旅順攻囲戦をどのように見ていたのだろうか。

払暁起テ出テ陣頭ニ立テ前面ヲ望メハ、前面ノ高地（注記略）ハ我軍悉ク之ヲ占領シ、旭日旗朝風ニ翻リ、将士其全戦ニ蟄集シ、工事モ殆ント終レリ。嗚呼、何等ノ壮快ゾ。銃砲声全ク止ミ、皆曝露シテ行動セリ、高地ノ嶺頂ニハ幾多ノ将士立チテ旅順口ヲ瞰制眺望セリ。（後略）。昨年六月四日始メテ李家屯ノ陣地ニ就キタルヨリ正サニ七ヶ月（二百十三日目）ナリ。此間銃声或ハ砲声ヲ聞カサルコト一日モナシ。然ルニ今ヤ我攻囲軍其目的ヲ達シ、今日ハ始メテ銃砲声ヲ耳ニセス眠ニ就クコトヲ得タリ。（明治38年1月2日条、下巻、5頁・6頁）

このように旅順攻囲戦が終わった感慨を書いている。そして、翌日3日には、戦場の過酷な状況を克明に記し、「敵兵ハ茲ニ至ルマテ能ク防戦セリ」と賞賛のことばも書いている。連隊命令で「軍ハ目下旅順要塞受領中ナリ」、4日には、第十一師団命令で「軍ハ続テ旅順要塞ノ受領中ナリ」と刻々と旅順開城の手続きが継続中であることを知らされている。5日には、11カ条からなる「開城規約」を全文載せている。そして、「本日正午」に「我軍司令官ト敵ノ守将ステッセルトノ会見」と、「本日ヲ以テ開城」が完了する筈と書いている。

1月9日には、「本日拝受シタル 勅語・令旨及奉答文等左ノ如シ」の書き出しで、大山巖満洲軍総司令官から伝達された勅語を拝受したこと、それに対する奉答、山県有朋参謀総長から伝達された皇太子・皇后からの令旨、感状が列記されている。それに続いて、「昨日及本日村田氏ヨリ聞キタル事項」として、16項目の情報を記録している。内容は、頗る外聞を憚るような内容ばかりである。そのなかに、

四、某旅団（嶋村少将）命令ニ、旅順ハ陥落セリ云々ト第一項ニ書キ、士気ヲ鼓舞シ難局ヲ支持シタルコトアリ云々（昨年沙河会戦当時ノコトナラン）、嘘モ時ニヨリテハ効力アルモノナリ。所謂方便カ。

五、一月一日午後十一時少シ前旅順開城申出ノ通報総司令部ニ達スルヤ、直ニ之ヲ全軍ニ通報シ、全線非常ノ活気ヲ呈シ大ニ祝捷ヲ催セリト云フ。

（明治38年1月9日条、下、pp.30・31）

とある。森が記載した第5項は、まさに明治38年1月1日の狂喜乱舞した第十二補助輸卒隊の状況と合致する内容である。しかし、森は第4項の後にこれを書いていること、他の項目がほとんど「田村氏」による満洲軍参謀部における内緒話に近い誹謗中傷・憶測⁷⁴⁾などを含むことを勘案する

73) 森俊蔵日露戦役従軍日記刊行会編『森俊蔵日露戦役従軍日記』上・下2巻、高志書院、2004、2006。以下、史料を引用する際は、「上、p.○」のように刊行本のページ数を明示する。

74) 第三項で、満洲軍総司令部が第三軍の実力を「三分ニハアルモノト推定」しているが、森は、「二分一ノ

と、満州軍の上層部が第三軍の苦心惨憺たる甚大な被害のうえにからくも達成した旅順陥落を、うまく利用したことを自慢するような内容である。

この「田村氏」とは、1月8日に柳樹房にある第三軍司令部に出向いたおりに、たまたま会った「満洲軍総司令部」の「騎兵参謀将校」で、森とは「同期」の田村参謀大尉⁷⁵⁾であった。まさに、田村参謀は「総試司令部ノ使命ヲ帯ヒ」てやって来たことがわかる。同期ということもあり、森に満州軍参謀部のなかで出ている様々なことを闊達に話したようである。それが、1月9日に16項目にまとめられて記録されたことになる。

この田村参謀の話からみると、満州軍司令部では第三軍の作戦と戦闘について相当不満が募っていたことをうかがわせる内容である。司馬遼太郎が『坂の上の雲』で描いた第三軍の猪突猛進ばかり繰り返したずらに兵士の損耗を増やす無能な戦い振りを活写しているが、それに通ずる内容である。司馬が描いた乃木の無能な指揮ぶりは、当時の満州軍上層部にわだかまっていた第三軍に対する不満に一致したものと言える。

田村参謀は、上記の沙河会戦の折りに、旅順陥落という偽情報を流して軍を鼓舞したこと、1月1日に旅順開城の一報が入るや、直ちに全軍にその旨を速報することで全軍の士気を高めたことを、誇らしく語っている。

森が旅順攻囲戦の悲惨・惨憺たる戦場の様子を認めている姿勢と、満州軍総司令部の戦略的情報操作や第三軍への不満とに大きな乖離を感じる。

日露戦争に歩兵第16連隊（新発田）の上等兵として出征した茂沢祐作が復員後に清書して大切に保存していた『明治三十七、八年日露戦役従軍日記』（以下、茂沢従軍日記と略す）には、旅順陥落の報に接した時の状況について、興味深い記述を残している。

昨晚我々の寝に就いた十二時過ぐる頃、なんとも知れぬワーンという声に驚かされて眼を覚ますと、我が宿舎の直前なる第一中隊本部の宿舎で万歳万歳というのであった。「何だ今頃騒々しい」と小言いしつつまた枕に就くと、いつになく勇ましい伝令の声で、分隊長殿！というのが門口に聞こえた。「なんだろう今頃」と疑いの雲が吾人の脳裏に映ずる一転瞬、旅順の「ステッセル」が降参しましたという回報であった。何たる目出度く喜ばしいことであろう。覚え枕を蹴って万歳を唱えたのあったが、たちまち「また元日のお祝いに喜ばせるための話を作

ㄨ カ五分三位」と当事者として第三軍の損耗状況を語っている。また、第七項では「満洲脚氣（寓話ナリ）頗ル流行スルコト（否脚氣ニ罹ラムナリ）。開祖ハ山口少将ナリト」と脚氣流行の原因について将校たちの間で様々な憶測が拡がっていたことを伝えている。森と歓談した「田村氏」は、第三軍の作戦に疑問を持っていたらしく「総司令官ドシ〜前進シテ軍司令部ヲ推進スルコトアリ」と話し、続いて「第三軍ハ治外法権」状態であり、「第三軍要塞攻撃ノ方法ヲ誤レルコト」、「第三軍司令部ハ統一ヲ欠ケルカ如シ」と手厳しい。最後に森が記録した第16項は「第八師団は未タ戦闘セス。完全ニシテ遼陽ニ冬営シアリ」と、他の師団がロシア軍に対峙し激しい戦いを続けているなかで、何をやっているのかという憤りまで透けて聞こえる。

75) 前掲注73)、下、p.26。1月9日には、「畏友満洲軍総司令部参謀田村騎兵大尉ト轡ヲ駢ヘ旅順市街ニ入リ、親しく歓談しながら旅順を視察、この後、田村参謀は、「師団参謀部ニ赴キ、要務（昨夜数回電報来レリ）ヲ便ス。」と、満州軍総司令部からの指示を師団参謀部に伝える任務に就いている。

ったのではあるまいか。現に遼陽戦の時も、沙河の戦闘の時も、二、三回話されたではないか」「軍隊では時々元へがあるから困るんだがなあー」これらのために喜びもたちまち消されて、「話だろう」に終わってしまった。しばらくすると、いつも沈黙を守っておられる本間軍曹が、おいおい起きないか、須貝君おい佐藤君、茂沢君はいないか。と言うかと思えば、新発田旭町——、などと謡いかつ舞っておられたが、我々の疑いを晴らすことは出来ず、誰も起きるものではなかった。⁷⁶⁾ (明治38年1月2日条)

まるで、「狼が来る!」というイソップ物語のオオカミ少年の寓話に似たエピソードを書いている。「嘘モ時ニヨリテハ効力アル」「所謂方便」と田村参謀が語った情報操作に引っ掛かった兵士が、それに懲りて、真夜中に発信された旅順陥落の報にも真偽を疑い冷ややかな反応もあったことがわかる。満州軍総司令部の思惑どおりに欣喜雀躍した第十二補助輸卒隊と、同じ第一軍にありながら第二師団の兵士茂沢の反応の違いがおもしろい。同じ日露戦争を闘った軍隊内でも、様々な思いと思惑が交錯していたことがわかるエピソードである。

9. 来電 第一軍兵站獣医部長ヨリ隊長宛、軍馬去勢術施行二関スル件

1905 (明治38) 年7月から始まったポーツマスにおけるロシアとの講和交渉の結果、9月5日に「日露講和条約」調印をもって日本とロシアとの戦闘状態は解除されることとなった。表題として掲出した「来電」は、翌日、9月6日に書かれた内容である。未だ日露講和条約調印の情報は、第十二師団第十二補助輸卒隊までは届いていない。9月15日になって、やっと「休戦命令」が伝達されてくる。

張家楼子兵站司令部ヨリ休戦命令、通報、 (明治38年9月15日条)

10日遅れで第十二補助輸卒隊に届いたことになる。

第一軍兵站獣医部長からの電話連絡を受けた隊長は直ちに「返電」を返している。しかし、隊長から第一軍兵站獣医部長に伝えられた内容は記載がないので、知るよしもない。

「軍馬去勢」とは、どのような内容を指しているのだろうか。武市銀治郎が書いた『富国強馬』を参考にしながら、馬の品種改良と「去勢」の関係について述べる⁷⁷⁾。

欧米では普通に行われていた「軍馬去勢」は、明治維新後の日本ではまだ実施されていなかった。日本では「去勢」による動物の品種改良の風習は定着していなかったのである。そのため、近代日本の馬は、軍馬としてはまったく用をなさない状況だった。軍馬改良の努力は明治初年以來続けられていたが、日清戦争の際動員された軍馬は軍事物資運搬には適せず、馬卒を噛んだり暴れたりのため、兵士が負傷する状態だった。

76) 茂沢祐作『ある歩兵の日露戦争従軍日記』草思社、2005、pp.125・126。

77) 武市銀治郎『富国強馬—ウマからみた近代日本—』(講談社選書メチエ) 講談社、1999。pp.58-103。

1900年に勃こった北清事変では、日本の軍馬を称して、「日本軍は、馬のような恰好をした猛獣を使用している」と揶揄されるほど使用が困難な状況にあった。そのため、軍馬の改良は焦眉の急ともいべき陸軍の課題となった。当時、欧米の軍隊は軍馬として牝馬を主に使用していた。それに対して、日本は牡馬のみしか使用できなかった。牝馬と牡馬を交用するなど不可能であった。既に欧米では軍馬の去勢が普及していたため、牝馬と去勢した牡馬（騾馬^{せんば}）を交用しても、従順で列を乱すようなこともなかった。

北清事変の苦い経験が、翌1901（明治34）年4月に成立する「去勢法」という法律に繋がった。しかし、直ちに馬の去勢が実施できたわけではなかった。去勢の習慣がない日本では、まず「馬匹去勢術訓練生規則」によって去勢術を修得した修業生が誕生するまで待たなければならなかった。やっと馬匹の去勢が効果的に実施できるようになったのは、「去勢法」発布後10年を経た1911（明治44）年からであった。

この武市の説では、日露戦争時に動員された「軍馬」は、未だ去勢を施されていない牡馬だったことになる。

日露戦争に動員された馬匹は、実に17万2千頭にのぼった⁷⁸⁾。そのほとんどは未だ去勢術を施されていない牡馬だったことになる。第十二補助輸卒隊には馬匹が4頭配属されていた。『第十二補助輸卒隊陣中日誌』の冒頭に掲載された「編成表」⁷⁹⁾（明治37年4月5日）の備考欄に、

五、本部馬匹一ハ隊長、各小隊各一ハ小隊長乗馬トス、

とあり、幹部乗馬用として4頭が配当されていた。爾来、1905（明治38）年12月6日第十二補助輸卒隊が復員「解散」する前日まで、隊と行動を共にした。

三、馬匹返納 当隊馬匹、小倉以下四頭、下関要塞砲兵連隊へ返納ス、

（明治38年12月5日条）

動員された馬匹は、支給された武器と同じく、所属部隊に返納されている。当時、陸軍は動員した馬匹には、1頭ずつ号名を付与していた。第十二補助輸卒隊に配属された4頭の軍馬は、上記の「小倉」⁸⁰⁾（隊長乗馬用）、その他の3頭の名称（「勝扇」⁸¹⁾・「亀鶴」⁸²⁾・「要封」⁸³⁾）が確認できる。

78) 大瀧真俊「帝国日本の軍場制作と馬生産・利用・流通の近代化」『日本獣医史学雑誌』53号、p.33。

79) 拙稿「『陣中日誌』から見た補助輸卒隊の日露戦争（1）」『人文学部紀要』42号、2022年3月、p.34。

80) 「小倉」号については、明治38年9月12日条に、

七装鉄 馬匹四〇二号小倉以下三頭張家楼子兵站司令部ニ於テ改装ス

とあり、「小倉」は、通し番号で「四〇二号」と戦時馬匹名簿に記載されていたことがわかる。

81) 「勝扇」号については、『第十二補助輸卒隊陣中日誌』では、3カ所出てくる。

七 馬匹補充 馬匹三〇六文公号ヲ撫按屯兵站病馬廠ヨリ受領シ同時ニ同廠ヨリ借用中馬匹ヲ返納ス（明治38年9月9日条）

六 差遣 輸卒一名馬匹勝扇治療ノ為鉄嶺ニ差遣ス（明治38年10月5日条）

この後で、「勝扇」号は重病でなかったことが判明したことを記録している。

日露戦争に従軍した軍馬は、「戦時馬匹名簿」に番号と名称が記載されていたようである。詳細な従軍日記を残した森従軍日記において、中隊長（後、大隊長）の愛馬として復員まで同行する「遼東」について、森は次のように書いている。

本日午後鹵獲馬ノ交換分配ヲ受ク。名ハ遼東ト称ス。乗馬下馬ヲ嫌フ。調教ヲ要ス。騙馬八歳、青毛、体尺五尺三寸一分アリ。別徴トシテハ右後肢一白ナリ。又額ニ白毛僅カニアリ。交換受領後自ラ騎乗セシニ、頗ル良シ。但シ、鋭敏ニシテ〈稍〉物ニ驚ク。又頗ル乗馬下馬ヲ嫌フ。下馬ノ際騒擾シテ遂ニ落サレタリ。即チ右ノ鐙ヲ脱シ右脚ヲ左脚ニ揃ヘ左鐙上ニタテル時ノコトナリ。徐々ニ調教セハ沈静スルニ至ルヘシ。⁸⁴⁾ (明治38年1月17日条)

森は「配分」された馬を「遼東」と名付けている。そしてこの「遼東」は8歳の「騙馬」であることがわかる。騙馬とは去勢されている馬の呼称である。ロシアから「鹵獲」した「遼東」は、去勢された軍馬であった。

森従軍日記を見ると、森が所属する第六中隊では軍馬が124頭配属されており、その内訳は「将校馬五頭、在来馬三十七頭、徴発馬八十二頭」であることを記している。その馬匹のうち「到底軍役ニ堪ヘサル見込馬」として、「善岸・讃利・善十・善郷」以下26頭を報告書に列記している。同じ報告書には「重症患馬」として「善白」以下5頭を「鞍傷」で「軍役ニ堪ヘサル」馬匹として挙げている⁸⁵⁾。

このように徴発馬を含めて、日本軍の軍馬には総て個別に馬名が付けられていたことがわかる。『第十二補助輸卒隊陣中日誌』では、毎日の糧食支給（「経理給養」）欄には、「馬匹四頭」と4頭分の馬糧が支給されたことを記載している。

武市による軍馬去勢に関する日露戦争当時の動員馬匹は、ほぼ牡馬でしかも去勢はされていなかったと推測できるとしている。どうもこのように日露戦争中に出征した軍馬のほとんどが去勢を施していない馬であったみているようである。

一方、本稿の見出しに掲出した条文では、明治38年9月6日に第一軍兵站獣医部長からの連絡は、第十二補助輸卒隊隊長に対して、「軍馬去勢術」の「施行」を督促するものだったと考えられ、武市による日露戦争時の軍馬未去勢状況だったという説明と矛盾することになる。

第十二補助輸卒隊には様々な職業に就いていた者を補助輜重輸卒として編成しているが、武市が

六 馬匹診断勝扇管内馬匹検査委員佐藤獣医ノ診断ヲ受ク（診断ノ決果悪疫ノ徴ナシ）（明治38年11月11日条）

82) 「亀鶴」号は、明治38年9月4日条に、

三、衛生（中略）

馬匹四二号亀鶴骨膜炎兼顆粒性皮炎ニテ撫按屯兵站病馬廠へ入厩（同時代馬借用）とあり、病気になって病馬廠へ送った記事のなかに見える。

83) 「要封」号についても、病気を発症した記事のなかに見える。

六 病馬 馬匹二十号要封発病ノ為撫按屯兵隊病馬廠ニ於テ治療ヲ受ク（明治38年8月11日条）

84) 前掲73) 著、下巻、pp.40・41。

85) 前掲73) 著、上巻、pp.227・228。

いう国家試験合格者である「馬匹去勢術」修業生が存在するという記載はない。上記「編成表」に「医官（見習い）・医学生」は見えるが、この2名に馬匹に対する医療知識があったかどうかは不明である。

国立公文書館が運用する「アジア歴史情報センター」には、日露戦争時の「陣中日誌」がいくつか公開されている。各部隊は、「動員下令」が発せられてから、部隊の戦時編成に多忙な毎日を過ごす様子を記録している。なかでも、近衛師団歩兵第三連隊の「陣中日誌」は「動員下令」から復員までが記録されている。明治37年2月10日条に⁸⁶⁾、

一、本日会報ノ主ナル件左ノ如シ、

(中略)

一、徴発馬匹ノ到着セルモノ百六頭、予定ニ対シ一頭過グ、

とあり、歩兵第三連隊は予定徴発馬匹が105頭であったことがわかる。歩兵第三連隊は、この後、慌ただしく新橋停車場から広島に向かって出発している。

明治37年12月に動員下令が下った後備歩兵第五十九連隊第二大隊陣中日誌でも、戦時編成が完了する直前に「馬匹四拾七頭(乗馬八 駄馬三九)受領」⁸⁷⁾とあり、やはり直ちに戦地に出発している。『歩兵第十四連隊第三大隊 陣中日誌』にも同様な記載がある⁸⁸⁾。

二月十一日 動員第六日 晴天 温度 十四度

(中略)

一午後五時、馬匹五拾五頭ヲ三本松ニ於テ受領ス、

一午後九時、兵員馬匹受領記入表ヲ提出ス、

やはり、戦時編成が完了すると、慌ただしく出発している。馬匹を受領して出征するまでの間が短いため、徴用馬匹は去勢術などを施す時間的猶予はなかったと推測している。

同じ「陣中日誌」のなかに、興味深い記事があるのを見出した。第一師団隷下の野戦砲兵第十六師団第一大隊の「陣中日誌」⁸⁹⁾である。

一、 去勢術ヲ開始ス、

(明治37年5月22日条)

86) 簿冊『明治三七・三～明治 三八 陣中日誌 (一) 近衛歩兵第三連隊』国立公文書館アジア歴史情報センターで閲覧できる。C13110519200。

87) 簿冊『後備歩兵第五十九連隊第二大隊陣中日誌 全』国立公文書館アジア歴史センターで閲覧できる。C13110369100。

88) 簿冊『歩兵第十四連隊第三大隊陣中日誌』明治37.2.5～5.10 国立公文書館アジア歴史情報センターで閲覧できる。C13110626400

89) 『陣中日誌其の1 野戦砲兵第16連隊第1大隊 明治37.5.14～38.2.25』「起筆 5月」アジア歴史情報センターで閲覧できる。C13110624000。

第一大隊では、配属された馬匹に「去勢」を施術したとする記事である。そして、6月13日には、次のような内容が書かれている⁹⁰⁾。

所 将来ニ関スル意見

徴発馬ノ調教ハ、悍馬ニ去勢ヲ施行シ、一週間ノ後、独乗ヲナシ、後一週間後ニ駆法教練ヲナシ、総計三週間ノ日時ヲ於テ、大略調教ヲ終ル予定ナリシニ、去勢ノ結果ハ、一週間後ニ独乗シ得ル程度迄ニ治スル能ハズ、半数以上ハ二週間後ニ独乗シ得、尚、少数ハ三週間ヲ要セリ、故ニ、徴発馬ヲ去勢シテ後、輓馬トシテ使用シ得ル迄ニ調教センニハ、五週間ヲ要スルナラント信ズ、
(明治37年6月13日条)

これは、5月22日に実施した「去勢術」の経過についてまとめた報告の摘要とでもいうべき内容である。

第一大隊に配属された徴用馬に施した去勢術の経過予測では、「三週間ノ日時ヲ於テ、大略調教ヲ終ル予定」であったが、経過はそれほど順調ではなく、最終的に「輓馬トシテ使用シ得ル迄ニ調教センニハ、五週間ヲ要スル」と結論付けている。

第一師団には、4つの野戦砲兵連隊が隷属していた。野戦砲兵第一連隊・野戦砲兵第十六連隊・野戦砲兵第十七連隊・野戦砲兵第十八連隊である。野戦砲兵第一連隊は、明治37年3月12日には動員完結し、3月19日には広島に移動している。5月10日以降、金州の戦いを経て旅順攻囲戦で活躍している。一方、野戦砲兵第十六連隊は、遅れて5月14日に動員下令、20日には動員完結しているが、なぜか、そのまま58日間待機し⁹¹⁾、やっと7月19日になって宇品に集合し8月2日に大連湾に上陸している。以後、旅順攻囲戦・奉天会戦に参戦している⁹²⁾。

『野戦砲兵第十六連隊 明治三十七八年戦史』⁹³⁾のなかでも、「五月二十二日 徴発馬ノ去勢実施ニ着手ス」とあり⁹⁴⁾、連隊で一斉に着手した「去勢術」の効果について、第一大隊からの報告書の摘要が「陣中日誌」に記載されたと思われる⁹⁵⁾。

このようにみてくると、明治37年日露戦争の戦端が開かれた早い時期から、各師団で「去勢術」

90) 『陣中日誌其の1 野戦砲兵第16連隊第1大隊 明治37.5.14~38.2.25』「6月」アジア歴史情報センターで閲覧できる。C13110624100

91) 『陣中日誌其の1 野戦砲兵第16連隊第1大隊 明治37.5.14~38.2.25』「7月」アジア歴史情報センターで閲覧できる。C13110624200

92) 『簿冊『野戦砲兵第十六連隊第一大隊陣中日誌 其の一』国立公文書館アジア歴史情報センターで閲覧できる。C13110623700。

93) 『野戦砲兵第十六連隊 明治三十七八年戦史』アジア歴史情報センターで閲覧できる。簿冊として、アジア歴史情報センターで閲覧できる。C13110604900

94) 留守第一師団経理部長が明治37年6月29日に作成した文書のなかに、「野戦砲兵第十六連隊ハ過日来赤痢病患者発生、隔離ニ付病毒蔓延予防ノ為メ清潔法施行」とあり、この事態が鎮静化するまで待機したと思われる。国立公文書館アジア歴史情報センター「伝染病に関し仮建物建設及井戸水引用の件」C03025759000。

95) 前掲資料93)でも確認できる。また、簿冊『野戦砲兵第十六連隊 明治三十七八年戦史』国立公文書館アジア歴史情報センター C13110604900に詳しい。また、大日本奉公会編『日露戦役御旗之光-第一師管健児部隊戦記-』大日本奉公会編輯部、1907、pp.546-570でも概要が把握できる。

が実施されていたことがうかがえる。これを裏付けるように、4月22日には留守近衛師団長乃木希典から寺内正毅陸軍大臣宛に「漸次補充セル馬匹ニハ着々去勢術ヲ施行スルノ必要有之候ニ付」獣医の増員を申請し裁可を得ている。また、「去勢用器具及倒馬器」も申請している。

アジア歴史情報センターで「去勢」という項目で検索してみると、「戦用獣医材料追送の件」⁹⁶⁾という資料が出てくる。明治37年4月9日に、「満坤第七一六」号として陸軍省「騎兵課」に発した命令書である。当時の陸軍大臣・桂太郎が「大臣」欄に署名（花押）している。

戦地ニ追送スヘキ獣医材料ニ関シ左案ノ通達並通牒相成度

医務局へ御達案

一 獣医材料箱 甲号	二〇〇個
一 同 乙号	一〇〇個
一 同 丙号	一〇〇個
一 去勢術用捻撮子	四具
一 樟脳精	四五、〇〇〇丸
一 的列並底油	九、〇〇〇丸
一 報告用紙	九、〇〇〇枚

右衛生材料廠ヲシテ至急調弁セシメ獣医材料戦地追送用トシテ字品貨物廠へ送付セシムベシ

(「四月十日」の囲み押印がある)

高級副官ヨリ軍務局長へ通牒案

(「陸軍省送達 満発第「七二九」号」の囲み押印がある)

明治37年2月から始まった日露戦争開始から2カ月経過した時点での命令である。「至急調弁」とあるので、大至急「獣医材料」である「去勢術用捻撮子」を「四具」調達し「戦地」へ「追送」することを命じている。この時点では既に多くの軍馬が部隊とともに出征していたはずである。この戦時軍馬に対する「去勢術」用の道具を戦地に送っていることになる。「報告用紙」「九、〇〇〇枚」とあるので、総ての騎兵部隊に対して「去勢術」を実施し、その「報告書」を公用「報告用紙」に記載して返送させることを命じていることになる。

また、明治37年12月にも、留守第十師団長から陸軍大臣に宛てて、「第十師団補充馬廠馬匹、去勢術施行上、倒馬器壺組備付」けたいと申請を出し裁可されている。出征する師団だけでなく、国内の留守師団隷下の補充馬廠でも去勢が行われていたことがわかる⁹⁷⁾。このように去勢術が各師

96) 『陸満普大日記 明治37 明治37年「4月自1日～至15日」「戦時獣医材料追送方の件」アジア歴史情報センターで閲覧ができる。C03025502400、C03025566300。また、「戦用獣医材料交付に関する件」にも去勢のことが記載されてる。C03025599300

97) 「補充馬廠ニ獣医増加ノ件」国立公文書館アジア歴史情報センター C03025608800。「去勢術用器具及倒馬器備附ノ件」立公文書館アジア歴史情報センター C03025622500。「倒馬器壺組備付方申請ノ件」国立公文書館アジア歴史情報センター C03026118500。

団で本格化する時期には、第十二補助輸卒隊は軍馬4頭とともに既に出征していた。そのため、4頭の軍馬は去勢術を施さないままであったと考えられる。

そして、1905（明治38）年5月30日付けで第十三師団長が参謀総長山県有朋に宛てて、

一、各隊馬匹ノ多クハ五月十日以後ニ於テ去勢術ヲ施シタリ、其全部治癒シ終ルハ六月十五日頃ナリ、

と報告しており、各師団が着々と部隊所属の軍馬に「去勢術」を実施していることが推測される。こうした状況を考えると、9月5日という遅きに失した時期ではあるが、第一軍兵站獣医部長から去勢術施行の督促の電話があったとする『第十二補助輸卒隊陣中日誌』の記載は、第十二師団の最末端に位置付けられる補助輸卒隊のわずか4頭の軍馬についても、漏れなく去勢術を実施するように求めていることになる。

武市がいうように、「去勢法」の実施が実行できないまま日露戦争に突入した。という理解は、大幅に修正が必要になってくる。牡馬として出征した第十二補助輸卒隊の4頭の軍馬も復員・返納される時には、^{せんば}騾馬であった可能性が高い。

10. 恤兵品 慰問袋手拭齒磨粉ヲ唐家屯兵站司令部ノ手ヲ経テ受領

『第十二補助輸卒隊陣中日誌』では、計2か所、「慰問袋」⁹⁸⁾に関する記述がある。見出しとして掲出したのは、明治38年5月19日の記載のなかに見える「慰問袋」に関する記述である。もう1つは、明治38年6月15日の記載のなかに見える。

六被服及慰問袋 第二種帽四十六個及慰問袋五十個馬家塞兵站司令部ノ手ヲ経テ受領ス

5月19日条で確認できることは、この「慰問袋」は「恤兵品」として「兵站司令部」より受領している。この「恤兵品」については、次節で「恤兵部」及び「恤兵品」について考察していく予定であるので、本節では省く。

第十二補助輸卒隊に対して、日露戦争の戦闘行為が終了し、部隊も「ウイタイツン」まで戻って来て駐留中に慰問袋をもらっている。これより以前には、「慰問袋」受領の記載は一切ない。

また、関連する事項とし「慰問状」⁹⁹⁾がある。

98) 戦地の兵士などを慰問するために、日用品、娯楽用品などを入れて送る袋。日本国語大辞典 第二版編集委員会編『日本国語大辞典 第二版 第一巻』小学館、2000、p.1359。日露戦争や日中戦争当時盛んに戦地に送られた慰問袋について総合的に検討・分析した論文を未だ見出ししていない。戦時下の贈与という観点から考察した論文に、山口睦「戦時下の贈与－近代日本社会における国民的贈与の創出－」『文化人類学』76編3号。2011がある。山口は新聞資料などから慰問袋が果たした役割について「一方的な贈与行為」として考察している。しかし、慰問袋を受取った兵士の対応・感情、その後の反応などについては言及していない。

この慰問状については、『第十二補助輸卒隊陣中日誌』には唯一 1 か所に記載がある。

六来翰（中略）山口県豊浦郡々会議長石津次郎ヨリ慰問状（明治 38 年 3 月 23 日条）

概して『第十二補助輸卒隊陣中日誌』だけを見ると、補助輸卒隊の輜重輸卒へは慰問状や慰問袋の授与に関しては冷淡であったように感じられる。

また、他の部隊の陣中日誌を閲覧してみても、なかなか慰問状や慰問袋といった記述を見出せない現状にある。そこで、慰問状や慰問袋をもらった側の記述にはどのようなものがあるのか調べてみた。

最初に紹介するのは、日露戦争当時第一師団軍医部長であった鶴田禎次郎の従軍日記『鶴田軍医総監日露戦役従軍日記』¹⁰⁰（以下、『鶴田従軍日記』と称する）である。鶴田の従軍日記は軍医という立場から詳細な日記を残している。この鶴田従軍日記では 3 か所に慰問袋に関する記述がある。

① 慰問袋寄贈者に謝状を送る。

（一）東京日本橋区田所町一、松喜屋呉服店久田仙三郎、（二）同神田区五軒町十九、青木勇七、（三）同日本橋区浜町二ノ一、安田ヤス子。（明治 38 年 1 月 14 日条）

② 慰問袋を得たり（伊豆国加茂郡那賀川村那賀、土屋より）。（昭和 38 年 7 月 9 日条）

③ 慰問袋の差出人神田区東龍閑町十九番地石毛孝子なる少女に令状を発す。

（昭和 39 年 1 月 4 日条）

見出し得た慰問袋に関する記述は以上である。この記述のなかで注目すべきは、鶴田はもらった慰問袋の発信人に対して丁寧に住所及び氏名を記すとともに、「謝状」・「令状」を書いて発信していることである。このようにもらった慰問袋については、単に受領しただけでなく、受け取った旨を認めた令状などを出している。

このような記述は、森従軍日記¹⁰¹にも見える。

最初に、「慰問状」の記述を抽出する。

① 高知恤兵通信会ノ慰問状及大坂毎日新聞、茲ニ停止中到着ス（明治 37 年 7 月 29 条）

② 勝田久貫（22/7）・渡辺養次（10/7）・塩見弥太郎（15/7）三氏ノ慰問状及結城昌成ノ嘆願書来ル。（明治 37 年 8 月 6 日条）

③ 土井祐五郎ノ慰問状及毎日新聞来ル。（明治 37 年 8 月 16 日条）

④ 藤堂（7/8）・上野春平（1/8）・白本柳（8/8）三氏及ヒ妻（第五回2/8ノ来信来ル。何レモ無事慰

99) 戦地の兵士を慰めるために送る手紙。日本国語大辞典 第二版編集委員会編『日本国語大辞典 第二版 第一巻』小学館、2000、p.1359。

100) 青木袈裟美編『鶴田軍医総監日露戦役従軍日記』陸軍軍医団、1931。

101) 前掲注 73) で紹介した。

問状ナリ。 (明治 37 年 8 月 17 日条)

- ⑤ 高岡忠仁・越智庄吉・清家惣吉・三木文司・忽那清一郎・山内三之丞・道上安太郎・小島佐ノ助・堀井古登次・平岡金十郎・金泥綱次ニ発信ス。何レモ慰問状ナリ。

(明治 37 年 10 月 21 日条)

- ⑥ ^(第十信) 妻子 (15/10)・山下セツ (15/10)・浜野喜之助 (25/9) ノ書来ル。

妻ノモノハ傷病兵ヲ見舞ヒタル状況ト追送品発送ノ通知、他ハ慰問状ナリ。

(明治 37 年 10 月 22 日条)

- ⑦ 井原源助・浅野安起・(以下 11 名の氏名略) ニ発信ス。何レモ慰問状ナリ。

(明治 37 年 10 月 23 日条)

- ⑧ 立花尋常小学校職員・生徒ノ慰問状 (18/7) 来ル (明治 38 年 7 月 31 日条)

立花尋常小学校職員・生徒及姪あい女ニ宛テタル信書ヲ認ム。 (明治 38 年 8 月 1 日条)

- ⑨ 糟谷郡長新納氏ヨリ慰問状 (22/8) 来ル。 (明治 38 年 9 月 1 日条)

- ⑩ 高知武揚協会ノ慰問状 (27/8) 来ル。 (明治 38 年 9 月 8 日条)

以上 10 例検出できた。いずれも各地から森の手元に届いた「慰問状」である。そのうち、3 例 (⑤・⑦・⑧) では森は令状を発信していることがわかる。森は記載がない他の例でもきちんと令状を出したと想像される。なぜ、そのように推測するかというと、後の資料であるが、満州事変に出征した兵庫県出身の黒田常夫が復員後に自分がもらった慰問状¹⁰²⁾にそれぞれ丁寧に令状を出していることから判明する。このような令状は発信されてしまうと相手が受領して追跡は不可能になる。たまたま黒田が発信した令状のうち、何通もが「宛先不明」として黒田のもとに返送され、その返送された葉書を黒田が保存してくれていたことから判明する。

一方、「慰問袋」について記述している事例は、4 例掲出できる。

- ① 華族女学校卒業生並出身者団体ノ寄贈ニ係ハル慰問袋到着ス。一包ヲ、余・副官及二従卒ト共ニ分ツ。内ニ半紙二帖・封筒二十枚・鉛筆二本・鉛筆削一個・私製葉書二枚・針三本・木綿糸一把、合計七種ノ品物アリ。此紹介人ハ金井きよ子トアリ。又東京市下谷区谷中天王寺町卅一番地金井方佐藤為治トノ印刷名アリ。且ツ左ノ和歌ヲ記載シアリ。

あたくにを打ちほろほしてつゝ、かなく

帰りこん日を待ち祈るらん

美浜 (明治 38 年 1 月 5 日条)

出石閣下・補充大隊・谷口少佐・横道大尉・溝口大尉・青木長三郎・越智光太郎ノ諸氏、

102) 既に拙稿「戦争のなかの神戸市立二葉尋常小学校・二葉国民学校―『学校日誌』を素材として―(上)』『人文学部紀要』(神戸学院大学) 42 号、2022.3 で、「黒田常夫慰問文・書簡集」として紹介した慰問文ばかりを集めてある資料(筆者所蔵)である。500 通以上もの慰問文及び黒田による令状(返送された葉書)などである。黒田は兵庫県神崎郡豊富村出身で北支那派遣軍磯谷兵团所属であった。慰問文は所蔵する部隊「気付」で受領している。やはり満州事変に際して創設された「恤兵部」を経由しての受領であったと推測している。

及ヒ昨日到着シタル慰問袋ノ發送人タル佐藤為治氏外二名ノ婦人ニ発信ス。

(明治 38 年 1 月 6 日条)

- ② 四国各県ヨリ慰問トシテ寄贈シタル物品ノ内、香川県木田軍各村寄贈ノ絵葉書二枚、徳島県立高等女学校生徒第四学年原田きく子署名ノ手拭一筋ノ分配ヲ受ク。

(明治 38 年 6 月 18 日条)

徳島県立高等女学校生徒原田きく子ニ令状ヲ発ス。

(明治 38 年 6 月 24 日条)

- ③ 慰問袋(旭袋、旭に合ふてほろりと落ちぬ露の玉、寄贈人平いま子)及び絵はかきノ配分を受ク

(明治 38 年 8 月 24 日条)

平まい子ニ発信ス。

(明治 38 年 8 月 25 日条)

- ④ 土佐久礼町婦人会寄贈ノ慰問袋及万金丹ノ配分ヲ受ク。

(明治 38 年 10 月 6 日条)

いずれも貰った慰問袋の中身について詳細に記述している。慰問状の場合は書面の内容についての言及はない。一方、慰問袋の場合はどのようなものを寄贈されたかを逐一書いている。慰問状は、内地の人々からの戦意を鼓舞するような内容であったり、無事を祈る文面であろうと推測される。慰問袋に入れられた品々は、部隊からの糧食以外に受け取ることがない戦場にあつて、最も内地を思い出させるとともに、寄贈者への感謝の念を持った品々であった場合が多かったと推測される。4 例のうち、2 例で令状を書いて発信していることがわかる。残りの 2 例も日記には書かれていないが発信したと推測している。

森が記述した慰問袋に関する記述のなかで注目したい箇所がある。その部分を抽出したい。①に「一包ヲ、余・副官及二従卒ト共ニ分ツ」、②・③・④で「配分ヲ受ク」と書いている点である。

この「配分」がどのようなかたちで行なわれたのかは、定かでない。慰問袋の「配分」の様子を活写した従軍日記がある。伊沢従軍日記である。茂沢はある程度日記を書き綴ったものがまとまると実家宛てに手紙として送付していた。そのため、凱旋する過程で「規定以外の品物は一切持って行くことを許さない」¹⁰³⁾との通達があつても動揺もなかったと書いている。

明治 38 年 1 月 26 日条に「慰問状」の記述がある。茂沢従軍日記に書かれた「慰問状」の記述では、本人の忌憚のない感想などが書かれている。

昨夜、戦友本間重三郎君のところへ高橋太郎という村長を務めている人から慰問状に名花三妓(新湯芸者の吉田屋ヨシ、八会のヤス、今川屋モン、三名の写真)を添えて送られたので、僕は一妓の配分を受けた。戦地へ来ている兵士間には(その実将校も)婦人の写真や妙な画が(曲線の美を賞するのか)非常に持てはやされるのである。玉よけと迷信しているものもあるかも知れぬが、その実天の配剤は妙なもので、異性者を相愛する作用から起こるものらしい。¹⁰⁴⁾

103)前掲注 76) 著、p.323。

104)前掲注 76) 著、p.135。

と、書いて慰問状などに同封された婦人の写真などが兵士間で人気だったことを書いている¹⁰⁵⁾。他の従軍日記の記載にはない兵士の心象風景をうかがわせる記述である。

茂沢従軍日記のなかで、「慰問袋」が初めてみえるのは、明治38年4月13日の記述である。そこには、慰問袋の贈呈人の住所・団体名、そして、具体的な品々を列記している。

天より給りし慰問袋は、突如として我が手に入れり。表には東京市日本橋区新材木町一番地寄贈者杉村本店にて石田高吉と記し、日本橋区浜町一丁目二番地日本橋倶楽部内日本橋婦人会の取扱いである。中には縞ネル（イタリア）一切れ、清心丹（四十五粒入）一袋、楊枝（竹）一本、歯磨き粉（ダイヤモンド）一袋、鉛筆一本、半紙一帖、絵葉書（六枚）一組が入れてあった。私は何と言ってよいかわからぬ。ただ、「今までにないよいものをもらった」と喜んだのである。¹⁰⁶⁾

このように慰問袋1個に入れられていた品物を克明に書き出し、「今までにないよいものをもらった」と喜んだことを書いている。まさに慰問袋をもらった兵士たちが軍隊生活のなかで渴望している日用品などが送られたことを素直に喜んでいる。このように慰問袋を下賜された兵士たちが喜ぶ様子をより詳細に記述した箇所もある。

新潟県婦人教育会から慰問袋を寄贈になったのが、今日配分になったが、分隊へ六ヶしか来ないので、新参者にのみ配った。その体裁は多く更紗の五寸一尺ぐらいの大きさの袋に打ち紐を付けた袋で、その中に日用品を入れたのであったが、東京の寄贈と違い、表へ品物の名や員数が記してないので、開いてみねば分からず、大いに興味が高かった。中には新津や新潟の芸妓の写真と、受領者に宛てた艶めかしい手紙などが入っていたのがあったので、舎内は一時割れるばかりの騒ぎであったが、しばらくするとみなが返事を認めるために、そろって筆を執ったのでようやく静かになったが、兵隊は無邪気なのであるか、俗物が多いのであるか、可笑しい。そのほかに各人に一個ずつ宝命丸という薬が寄贈になった。¹⁰⁷⁾（明治38年7月8日条）

慰問袋にどのような品が入っていたのか、固唾を飲んで見守る兵士たちの様子を書いてあるが、同封の艶書に大騒ぎする兵士たちを茂沢は少々冷ややかな目線で日記に書き留めている。

どうも、日露戦争中早い時期から慰問状は戦地に発送されたようであるが、慰問袋は明治38年1月以降に戦地に発送されたようである。

第十二補助輸卒隊に配分された慰問袋も、明治38年5月及び6月であり、茂沢従軍日記の記述で兵士たちが慰問袋の中身を喜んだ時期と同じ時期に配布されていることになる。しかし、6月15

105) 前掲注 76) 著、p.228 には、「後備の第六中隊の小林上等兵と中山鉄三郎の両名より封書が届いたが、中山の手紙の中に、裸体婦人の写真を入れてあったが、相変わらず滑稽弁を奮っているそうだ。」と書いている。

106) 前掲注 76) 著、p.187。

107) 前掲注 76) 著、p.235。

日に配分を受けた慰問袋は「五十個」であり、到底全輜重輸卒に1個ずつ配分することはできなかったであろう。運よく慰問袋1個を受取った輜重輸卒たちの間で、茂沢が目当たりにしたような光景が繰り広げられたのではないかと推測している。しかし、『第十二補助輸卒隊陣中日誌』は、あくまで部隊の公的活動を簡潔に記載することが基本の書類であるため、個々の補助輸卒たちの感慨などは記載されていない。

(以下(4)に続く)